

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700865

研究課題名(和文) 青年期における死別経験後の心の発達変容プロセス

研究課題名(英文) The development process of bereavement experiences in adolescence

研究代表者

渡邊 照美 (WATANABE, Terumi)

佛教大学・教育学部・准教授

研究者番号：60441466

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：身近な他者を喪うという死別経験後に否定的側面だけではなく、肯定的側面での変化が起こることは、少しずつではあるが明らかになっている。しかし、青年期における検討はあまりない。本研究では、青年期の死別経験後の人格的発達として、肯定的側面と否定的側面の両方の変化が認められた。この結果は、成人期以降を対象にした研究と同様の結果であり、発達段階を問わず、死別経験後の変化として認められる可能性が示唆された。また死別経験後の人格的発達に関連する要因を検討した結果、死別経験の衝撃度や故人を思い出す程度等が認められた。

研究成果の概要(英文)：There is little by little that not only negative aspects, the change in the positive side occurs bereavement experience after losing familiar others will be obvious. However, not much study of in adolescence. In this study, as the development of bereavement experience in adolescence, changes in both the negative aspects and positive aspects were observed. This result is a result similar to a study of adult higher possibility that regardless of developmental stage, is observed as a change in the bereavement experience following was suggested. Further, as a result of examining the factors related to development of bereavement, enough to remember the deceased and degree of impact of bereavement experience was observed.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学一般

キーワード：死別 生涯発達 青年期 人格発達

1. 研究開始当初の背景

人生は獲得と喪失の連続である。生きていく限り、身近な他者の死は避けられない。それらの経験は多くの場合、耐え難い経験であろうが、人は大切なものを喪った時、変化する可能性を内在している。その中には肯定的な変化もみられ、喪失経験以前よりもさらに成熟した心の発達をとげることもある。それは哲学のテーマや文学作品の中にも見てとれる。しかし、喪失経験後の心理的プロセスにおける肯定的な変化が研究として具体的に検討され始めたのはそう古くはなく、1990年代後半からである(渡邊, 2008a)。現在では、欧米において、ハンドブックが出版され、喪失経験後の心の発達が、一研究領域として確立されつつある(例えば、Calhoun & Tedeschi, 2006)。また、本邦においても、価値ある知見が提出されている(例えば、安藤ら, 2004; 坂口, 2002)。

筆者は、これまで成人期以降の方を対象に、身近な他者との死別を通しての人格的発達に関する検討を行ってきた。その結果、身近な他者を看取するという経験により、人格的に発達することが明らかになった(渡邊・岡本, 2005, 2006)。具体的には、死に対する思索が深まると同時に、生きるということを手がけているという結果が得られた。このことは生涯発達の観点から重要な視点であると考えられる。

ところで、死別に関するテーマは、多くの場合、成人期以降の問題として取り上げられる。しかし、それ以前の時期において、死というテーマは意味をもたないのであろうか。例えば、青年期である。青年期においては、死の不安や恐怖に関する検討が多くなされているが(例えば、丹下, 2004)、身近な他者を喪うことによる成長・発達についてはほとんど検討されていない。

そこで、筆者は、青年期にある大学生を対象に、死別の経験と「死別経験後の人格的発達」の関連について、予備調査(対象者数 87名)として量的検討を行った(渡邊, 2008b)。その結果、死別経験の有無と「死別経験後の人格的発達」項目間に有意な関連は認められなかった。しかし、自由記述の部分では、57.9%の対象者が死別経験後、変化を感じており、「命の大切さを深く考えるようになった」等、具体的な変化が多く記されていた。つまり、青年期においても身近な他者との死別経験によって、心の発達変容がもたらされる可能性はあることが示唆された。青年が、死別により、身近な他者を喪うことによって、何を学ぶのかという点を実証的に示した研究はあまりないため、その点を明確にしておく必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、青年が死別により身近な他者を喪うことによって、何を学ぶのかという点を「死別経験後の人格的発達」と捉え、量的・質的分析を用い、肯定的・否定的両側面から

明確にすることを目的とした。そして、死別経験後の人格的発達に関連する要因を明らかにし、青年期における死別経験の意味について検討することとした。

3. 研究の方法

本研究では、以下のような研究方法で研究を遂行した。

(1) 青年期における死別経験後の心の変化に関する国内外の研究動向を調査し、先行研究の成果とそれらの問題点を整理する理論的検討を行う。

(2) 死だけではなく生の視点を含んだ人格的発達項目を作成し、身近な他者との死別と死別経験後の人格的発達に関連する要因の検討を行う。

(3) いのちに触れる経験が、人生に何をもたらすのか、研究結果をまとめ、周知する。

4. 研究成果

(1) 青年期における死別経験後の心の変化に関する国内外の論文のレビュー

青年期と死別経験後の心の変化(否定的、肯定的)に関する国内外の論文を概観し、その中で喪失経験後の心の発達がどのような文脈で研究され始め、現在どのように展開されているのかについて、先行研究の成果とそれらの問題点を整理した。

死に対する態度に関する研究は、高齢者を対象に、死に対する不安や恐怖等、死の否定的側面からの検討が多くなされてきた。代表的なものは、Templer(1970)の死の不安尺度(Death Anxiety Scale; DAS)である。しかし、死に対する態度は一次元的にとらえられないことが明らかになり、多次元的にとらえる尺度の開発が行われた。よく知られたものに、Gesser, Wong, & Reker(1987-1988)の死に対する態度尺度(Death Attitude Profile; DAP)がある。これは積極的受容、死の恐怖、回避的受容、中立的受容の4つの次元からなっており、死の恐怖以外の次元は死の受容を測定するものである。

わが国における死に対する態度の研究も高齢者を対象にしたものが多く(例えば、河合・下仲・中里, 1996)、青年期に注目すると、青年と死という問題を論じる際には、自殺の問題が扱われることが多かった。死の概念や死に対する態度は発達段階に応じて変化をしていくとされるが、青年期と死に対する態度に焦点化した場合、丹下(1999)の死に対する態度研究があげられる。この研究では、青年期の死に対する態度尺度を開発しており、死に対する恐怖、生を全うさせる意志、人生に対して死がもつ意味、死の軽視、死後の生活の存在への信念、身体と精神の死の6つの側面から構成されている。死に対する態度として、死の恐怖以外の側面も含まれているのが特徴である。

最近の研究動向としては、身近な他者を喪うことによる死別経験後の成長・発達について

での検討があげられる。これは従来、悲嘆のプロセスとして検討されていたが、死別経験以前の状態に戻るだけでなく、さらに新たなアイデンティティを構築していくという肯定的変化に着目した研究が、国内外を問わず行われ始めている。死に対する態度の形成にも、自己の死別経験は影響を及ぼしていると考えられるが、成人期以降の場合にはその関連が認められるという報告（渡邊・岡本，2005）がある一方で、青年期においては関連が認められないという報告（丹下，2004）がある。以上より、青年期までの死別経験が、死に対する態度形成にどのような影響を与えるのかということの解明していく必要が明らかになった。

（2）青年期における死別経験後の人格的発達の内面的構造

大学生215名を対象に質問紙調査を実施した。分析する際には、死別経験者のみを対象としたため、151名の分析を行った。

死別経験後の人格的発達の内面的構造を明らかにするために、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から、6因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度6因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった15項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。なお、回転前の6因子で36項目の全分散を説明する割合は55.69%であった。

第1因子は、8項目で構成されており、「私は、他人の価値観を受け入れることができるようになった」「私は、どのような人にもその人なりの良さがあると感じるようになった」等、他者に対して理解が深まり、他者を認めることができるようになったという内容の項目に高い負荷量を示していた。そこで「他者理解の深化」因子と命名した。

第2因子は、8項目で構成されており、「私は、自分に自信がもてなくなった」「私は、他人を信用できなくなった」等、自己に対して自信を喪失し、また他者や世界に対して不信感を持つ内容の項目に高い負荷量を示した。そこで「自己・他者信頼感の喪失」因子と命名した。

第3因子は、6項目で構成されており、「私は、死とは何だろうとよく考えるようになった」「私は、生きるとは何だろうとよく考えるようになった」といった死ぬことと生きることについて、考えるようになったという内容に対して高い負荷量を示した。そこで「生と死への関心」因子と命名した。

第4因子は、6項目で構成されており、「私は、他人が死ぬのが怖くなった」「私は、死を非常に恐れるようになった」といった死への恐怖を示す項目と「私は、命より大切なものはないと思うようになった」といった命の大切さを示す項目に高い負荷量を示した。そこで「死への恐怖と命の大切さ」因子と命名

した。

第5因子は、5項目で構成されており、「私は、考え方が柔軟になった」「私は、自分に対して肯定的になった」等、自己を受け入れ、成長した内容の項目に対して高い負荷量を示した。そこで「自己の成長」因子と命名した。

第6因子は、3項目で構成されており、「私は、死について考えることを避けるようになった」「私は、死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれを跳ねのけようとするようになった」等、死に対して逃避する内容の項目に高い負荷量を示した。そこで「死からの逃避」因子と命名した。

青年期における「死別経験後の人格的発達」について、本調査では6つの側面が示された。その中で、第1因子「他者理解の深化」、第2因子「自己の成長」については強い相関が認められ、死別経験によって、自己に対してと同時に他者に対しても受容性が高まり、成長することが明らかになった。これまでの成人期以降を対象にした筆者の研究と同様の結果であり、発達段階を問わず、死別経験後の変化として認められる可能性が示唆された。

今回、死別経験後の変化として、肯定的な変化だけでなく、否定的な変化も含めた検討を行ったので、質問項目選定の際には否定的な変化を含んだ選定を行った。その結果、第

3因子「自己・他者信頼感の喪失」が認められた。身近で重要な他者を喪失したとき、自己が揺らぐ感覚を経験し、物事に対して、積極的に取り組めない状態になることは、悲嘆の研究においても明らかにされており、このような状態から立ち直り、新しいアイデンティティを構築していくことが、死別経験後の人格的発達であると考えている。そのため、否定的側面での変化も重要なものであると考える。

（3）関連要因の検討

青年期における死別経験後の人格的発達に関連する要因を明らかにするために、各要因に対し、 t 検定、または一要因分散分析を行い、有意な主効果が認められた要因に対して、Tukey法による多重比較を行った。その結果、以下の関連要因が明らかになった。

死別経験後の変化の有無

身近な他者との死別経験後、変化があったと回答しているもの(94名)は、変化がなかったと回答しているもの(46名)よりも、「他者理解の深化」($t(138)=2.32, p<.05$)、「生と死への関心」($t(137)=2.46, p<.05$)、「死への恐怖と命の大切さ」($t(134)=3.66, p<.001$)において、有意に高い得点を示した。

死別経験の衝撃度

これまでの死別経験の中で、もっとも印象に残った相手との死別の衝撃度を4段階で尋ね、「もっともショック」「かなりショック」と回答したものを衝撃度高群とし、「あまり

ショックではない」「全くショックではない」と回答したものを衝撃度低群として、分析を行った。その結果、衝撃度高群(121名)は衝撃度低群(22名)よりも「他者理解の深化」($t(140)=2.71, p<.01$)、「死への恐怖と命の大切さ」($t(137)=3.90, p<.001$)、「自己の成長」($t(141)=-2.04, p<.05$)において有意に高い得点を示した。

故人を思い出す程度

これまでの死別経験の中で、もっとも印象に残った相手を、現在ではどの程度思い出すかを5段階で尋ね、「毎日思い出す」「しばしば思い出す」を思い出し高群、「ときどき思い出す」を思い出し中群、「ほとんど思い出さない」「全く思い出さない」を思い出し低群として、分析を行った。その結果、「生と死への関心」において、思い出し高群(30名)は思い出し中群(91名)・思い出し低群(28名)よりも有意に高い得点を示した($F(2,143)=5.20, p<.01$)。

家族の中に介護経験者がいるかどうか

高齢者介護を経験することによって、成長したり(例えば、石井, 2003)、死や生に対しての考え方が変化したりすることがある。しかし、本調査の対象者は大学生であるため、高齢者介護を中心となって行っているものは少数であると考えた。ただ、家族の中に介護をしている(いた)ものがいた場合、その様子を見ることでも、死や生、介護に対しての意識に変化が認められるのではないかと考えた。そこで、家族員に介護をしている、または介護を経験したことがあるものがあるかどうかを問うた。そして、家族の中で、介護の経験があるもの37名と、介護経験のないもの111名にわけ、 t 検定を行った。その結果、介護未経験者は、介護経験者よりも、「自己・他者信頼感の喪失」($t(143)=-2.25, p<.05$)、「死からの逃避」($t(142)=-2.54, p<.05$)において有意に高い得点を示した。

親介護意識

「将来、親の介護をすることになったら、私が中心になって介護したい」「子どもが親の介護をすることは当たり前のことだ」「将来、親の介護をすることになったら、家で介護したい」の3項目の合計点を平均したところ、10.14点($SD 2.44$)であったので、9点以下を親介護意識低群(58名)、10点以上を親介護意識高群(93名)とし、 t 検定を行った。その結果、親介護意識高群が親介護意識低群よりも、「他者理解の深化」($t(148)=-2.35, p<.05$)、「死への恐怖と命の大切さ」($t(145)=-3.78, p<.001$)で有意に高い得点を示した。

生についての思索

「あなたは、これまでに生(生きること)について考えた経験がありますか」という質問に対し、「深く考えたことがある」「考えたことがある」「考えたことがない」の3段階で回答を求めた。その結果、「深く考えたことがある」36名、「考えたことがある」105

名、「考えたことがない」10名であり、生(生きること)について考えたことのある対象者は9割を超えていた。一要因分散分析の結果、「生と死への関心」において、「深く考えたことがある」群は、「考えたことがある」「考えたことがない」の2群よりも有意に高い得点を示した($F(2,145)=5.93, p<.01$)。

死についての思索

「あなたは、これまでに死(死ぬこと)について考えた経験がありますか」という質問に対し、「深く考えたことがある」「考えたことがある」「考えたことがない」の3段階で回答を求めた。その結果、「深く考えたことがある」40名、「考えたことがある」105名、「考えたことがない」6名であり、死(死ぬこと)について考えたことのある対象者は9割を超えていた。一要因分散分析の結果、「生と死への関心」において、「深く考えたことがある」群は、「考えたことがある」「考えたことがない」の2群よりも有意に高い得点を示した($F(2,145)=8.97, p<.001$)。

生について話し合える存在

「あなたの周りに、生(生きること)について話し合える人はいますか」という質問に対し、「いる」「いない」「話し合いたくない」の3段階で回答を求めた。その結果、生(生きること)について話し合える人が「いる」114名、「いない」22名、「話し合いたくない」12名であった。一要因分散分析の結果、「他者理解の深化」では「いる」群は、「いない」「話し合いたくない」の2群よりも有意に高い得点を示した($F(2,144)=5.32, p<.01$)。また「自己・他者信頼感の喪失」では、「話し合いたくない」群が「いる」「いない」の2群よりも有意に高い得点を示し($F(2,142)=3.58, p<.05$)。「死への恐怖と命の大切さ」では、「いる」群が「いない」群よりも有意に高い得点を示した($F(2,141)=7.40, p<.01$)。

死について話し合える存在

「あなたの周りに、死(死ぬこと)について話し合える人はいますか」という質問に対し、「いる」「いない」「話し合いたくない」の3段階で回答を求めた。その結果、死(死ぬこと)について話し合える人が「いる」114名、「いない」21名、「話し合いたくない」13名であった。一要因分散分析の結果、「他者理解の深化」では「いる」群は、「いない」「話し合いたくない」の2群よりも有意に高い得点を示した($F(2,144)=5.25, p<.01$)。また「死への恐怖と命の大切さ」では、「いる」群が「いない」「話し合いたくない」の2群よりも有意に高い得点を示し($F(2,141)=7.72, p<.01$)。「自己の成長」では、「いる」群が「いない」群よりも有意に高い得点を示した($F(2,145)=3.24, p<.05$)。

(5) 死別について語ることの意味

死別による変化に関する質問紙調査228名の大学生を対象に質問紙調査を実施した。死別経験者181名(79.4%)、死別未経験

者 47 名 (21.6%) であった。その中で、死別経験によって「とても変化した」と回答したものは 78 名 (43.1%)、「少し変化があった」は 85 名 (47.0%)、「あまり変化はなかった」は 16 名 (8.8%)、「全く変化はなかった」は 2 名 (1.1%) であった。また死別経験者に対して、「経験した死別について、その経験を話す機会があったとしたら、個人的に、またはシンポジウム等で話をすることは可能か」との質問を行った。その結果、「とても変化した」と回答したもののうち 35.9% の 28 名が、「少し変化した」は 35.3% の 30 名が話をすることに同意した。反対に、「あまり変化はなかった」は 18.8% の 3 名、「全く変化はなかった」は 0 名と、変化を感じているものほど、死別経験を語ることに對して、肯定的であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

渡邊照美，病弱教育に対する大学生のイメージ - 病弱教育に携わる際に必要な専門性と困難さに着目して - ，教育学部論集，査読無，25，2014，65-74

渡邊照美，病気の子ども死の概念の発達 - 小児がん患児と健康児の比較 - ，くらしき作陽大学作陽音楽短期大学研究紀要，査読無，45(1)，2012，27-34

渡邊照美，青年期における死別経験後の心の発達の内的構造に関する探索的検討，くらしき作陽大学作陽音楽短期大学研究紀要，査読無，44(2)，2011，15-24

[学会発表](計 4 件)

渡邊照美，菅原伸康，障がい児の母親のライフコース選択時の心理変容プロセス，日本発達心理学会第 25 回大会，2014 年 3 月 22 日，京都大学

渡邊照美，菅原伸康，障がいのある子どもを育てる中での家族のライフコース選択プロセスの検討，日本質的心理学会第 10 回大会，2013 年 8 月 31 日，立命館大学

渡邊照美他 (シンポジウム)，結婚生活の継続のなかで配偶者との関係性はいかに育まれるか(6) - 死別への適応から - ，日本心理学会第 76 回大会，2012 年 9 月 12 日，専修大学

渡邊照美，青年期における死別経験後の発達に関する探索的研究，日本発達心理学会第 23 回大会，2012 年 3 月 9 日，名古屋国際会議場

[図書](計 4 件)

渡邊照美他，福村出版，新・青年心理学ハンドブック，2014，714 (分担 300)

渡邊照美他，ミネルヴァ書房，シリーズ生涯発達心理学 1 エピソードでつかむ生涯

発達心理学，2013，245 (分担 176-187)
渡邊照美他，ミネルヴァ書房，シリーズ生涯発達心理学 5 エピソードでつかむ老年心理学，2011，291 (分担 128-131)
渡邊照美他，ミネルヴァ書房，特別支援教育を学ぶ人へ - 教育者の地平，2011，297 (分担 265-273)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 照美 (WATANABE, Terumi)

佛教大学・教育学部・准教授

研究者番号：60441466